活用形の機能

文章の中で、活用する語（動詞・形容詞・形容動詞・助動詞）が、意味の「切れ続き」に応じて、語形を変化させることを「活用」という。日本語の場合には、活用する語が文末、句末に来るのが原則なので、「切れ続き」という形で活用が捉えられる。

（「切れ」とは文章が終わる場合、「続き」は、どのように後ろに続いてゆくかを意味し、その意味に応じて形が変わる）

〈動詞〉

《未然形》 まだ起こっていないことを示す形。単独では用いない。

（1）助動詞「ず、む、まし、ね」が接続して、「打消、意志、願望、誂」の意味を示す：「行かず」「行かむ」「行かまし」「行かね」
（2）助詞「ば」が接続して仮定条件：「行かば」
（3）複合語の上項となる。「むかふす（向伏す）」

《連用形》 動詞の基本的な働きを持つもので、最も用例数の多い活用形。

（1）複合動詞の上項に用いられる：「書き直す」
（2）名詞形：「游び」
（3）中止法：「野を越え、山を行く」
（4）時・完了の助動詞の接続：き、けり、つ、ぬ、たり（「り」は已然形接続）
（「て」接続による音便形）
（5）関西方言では命令形となる：「早、行き」

《終止形》 文章を終える役割をする。

（1）文章が終わる：「山を行く」
（2）推量系統の助動詞が付く：「行くらむ」「捨つらむ」
（3）引用の「と」が付く：「行くと言ふ」
（4）逆接の「とも」が付く：「行くとも」「捨つとも」
（奈良時代は上一段(見とも)。鎌倉時代以後連体形に接続）

《連体形》 基本は体言を修飾する働きと思われる

（1）体言を修飾する：「捨つる物」
（2）準体法：「捨つるは惜し」
（3）連体形終止：「常にと君が思ほえたりける」（万206）
（4）「ぞ・なむ・や・か」の係り結びの「結び」となる。

《已然形》 すでに起こったことを表す。

（1）確定条件を表す（＋ば、＋ど、＋ども）、順接条件・逆接条件：「行けば」「行けど(も)」
（2）已然形中止（「条件句を作る」とも言われる）：「隠らひ来れば　天伝ふ　入日さしぬれ
大夫と　思へる我れも　敷栲の　衣の袖は　通りて濡れぬ(万135)
（3）「こそ」の結びとなる：

《命令形》 命令の意味。文章が終わる。

（存在詞は原則として命令形がない）

5-839　春の野に切り立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る。
17-3657あしひきの山のこぬれに白雲に　立ちなびくと　あれに告げつる
17-3969　…時の盛りを　いたづらに　すぐしやりつれ　しのはせる　君が心を　うるはしみ
…
02-0135　…隠らひ来れば　天伝ふ　入日さしぬれ　大夫と　思へる我れも　敷栲の　衣の袖は　通りて濡れぬ
03-0475　…およづれの　たはこととかも　白栲に　舎人よそひて　和束山　御輿立たして
ひさかたの　天知らしぬれ　臥いまろび　ひづち泣けども　為むすべもなし

〈形容詞〉

《未然形》形容詞は時間の概念を含まないので、原則として存在しない。

《連用形》副詞句（連用句）をつくる。
「高くそびえる」
「赤くは取る」（江戸時代になって、「は」が「ば」と発音されるようになり、この「高く」は未然形と解釈されるようになる。

《終止形》文章を終える役割をする。
「山高し」

《連体形》。
（1）体言を修飾する：「高き山」
（2）準体法：「高きは富士山」
（3）連体形終止：「山高き」（強調）
（4）「ぞ・なむ・や・か」の係り結びの「結び」となる。「山ぞ高き」
（5）「こそ」の結びとなる。「山こそ高き」

《已然形》
形容詞は時間の概念を含まないが、既に存在するものを描写するという点では已然形は存在して良い。条件を表すとき、奈良時代には、未然形と已然形の形（け）を用いた。
「恋ひけば」

《命令形》命令の意味。文章が終わる。
（存在詞は原則として命令形がない）

形容詞の活用は、動詞の活用に合わせて整理しているので、これだけの活用形しかないが、実際には以下のような活用語尾（派生辞）がある。

《名詞形》「さ」：赤さ
「み」：赤み
「げ」：寒げ。この「げ」は「気」からできたものであるかもしれない。

《副詞形》「み」：山高み（ミ語法）

二段と四段

(a)両活用形式の相違

	四段	二段
活用行	ア・ナ・ザ・ダ・ヤ・ワ行欠	全行あり
語幹音節数	一音節語幹がない	一音節語幹有り
ゆ（る）・す	接続する	接続しない
り	接続する	接続しない
す（尊敬）	接続する	接続しない
ふ（継続）	接続する	接続しない
音便	起こす	起こさない

(b)両活用形式の関係

［下二段＋す→四段、下二段＋る→四段］の例が多い。

［四段＋る→下二段、四段＋す→下二段］の例は破壊的動作に集中する。

〈具体例〉

ある（下二）→あらす（四）
かる（下二）→あらす（四）
くる（下二）→くらす（四
あく（下二）→あかす（四）
ほかたくさん。

〈例外〉

あふ（会、四、自動詞）→あはす（下二、使役的他動詞）
おふ（負、四、他動詞）→おほす（下二、使役的他動詞）
うむ（生、四、他動詞）→うまる（下二、自動詞）
わく（分、四、他動詞）→わかる（下二、自動詞）
そのほか破壊的動作を示す動詞はまとまった例外となっている。

(c)上二段はすべて自動詞。

(d)下二段とア列音、上二段とオ列音、ウ列音が密接な関係。

(e)上一段動詞は上二段から変化したもの。

「みる（廻）」「ひる(干)」は奈良時代では上一段であるが、上代特殊仮名遣ではイ乙類の漢字が用いられているので、もとは上二段であったことが明らかにされている。

(f)一段動詞

いる（射る、鋳る）　〈煎る（四）、入る（四、下二）〉
きる（着る）　〈切る(下二)、切る（四）、霧る（四）、錐る(四）〉

いさちる（涕泣る）［もと上二］
にる（似る、煮る）〈四段なし〉
ひる（**嚔る**、簸る）［「嚔る」はもと上二］
あらびる（荒びる）［上二形もあり］上一の例は連体形。連体形から一段化（推断と言われる）
みる（見る、**廻る**）［「廻る」はもと上二］
ゐる（**居る**、率る）［「居る」もと上二］

(g)助動詞の接続

	四段	二段
未然形接続：ゆ、す、ず、む、しむ、じ、まし、まじ	a	e
連用形接続：き、つ、ぬ、たり、けり、けむ	i	e
終止形接続：なり、べし、らむ、らし	u	u
連体形接続：ごとし	u	u r u
已然形接続：無し	e	u r e

例外的接続：べし、まじ、らし（終止形。上一未然、ラ変連体）

(h)推定される古い活用形の意味

造語形：	a
未然形・連用形・命令形：	e
終止形：断定・指定形	u
連体形：終止形・名詞形	uru
已然形：過去形	ure

四段化

○下二段活用形式から四段動詞ができあがる過程。
下二段動詞から異なった意味を表す動詞が派生し、それが四段活用の形式を採った過程

名詞形（連用形）：	i
已然形 ：	e
終止形・連体形：	u
造語形 ：	a

たとえば「欠く(下二段)」は自動詞であるが、それから他動詞的な意味をもつ動詞を派生するとき、下二段と区別される必要がある。そこで、

名詞形：下二段のeとは異なった母音として、i名詞語尾を接続。

已然形：二段の体系の中では、reが已然形であったが、reがどのような接辞であったかが分からなくなっていたと思われるので、そのreではなく、その末尾音eが特徴として捉えられ、派生に利用されたのではないか。

終止形：基本の形で、派生の基本となっているのであるから、変化させる訳には行かなかった。

連体形：連体形はすでに連体修飾や準体法の用法の方が一般的になっていたとすると、連体形が終止形と形が異なる必要がないので終止形をそのまま利用した。

未然形：造語形（情態言）がそのまま活用の中に取り込まれた。